

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。  
阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

### 貧しい人々に尽くした医師

#### 大栗 清實

大栗は明治35年（1902）12月1日に、村会議員・農会長であった佐馬太郎の三男として生まれる。

大正5年（1916）、大野尋常小学校を卒業。小学校では開校以来の成績優秀生として県知事表彰を受けた。同10年に県立富岡中学校（現富岡西高校）を特待生として優等で卒業する。少年時代から多趣味で和歌・俳句・囲碁・釣り・野球を好み、大野村の中学生を誘って和歌会「投石会」をつくり会長となっている。大正10年（1921）4月、



大栗 清實

旧制第五高等学校（略称・五校、現熊本大学）理科乙類に入學。

同13年五校を卒業し旧制岡山医科大学（現岡山大学）へ入學した。

在学中にマルクス・レーニン主義に共鳴。「無産者新聞」共産党機関紙『赤旗』の配布を行った。昭和3年

3月26日、治安維持法で逮捕され、10月21日岡山地方裁判所で懲役1年・執行猶予3年の判決を受けた。

大栗は、翌4年1月に上京。馬島潤（徳島中学校卒業の医師）の労働診療所に内科医として勤務した。同年2月28日に高瀬トクエと結婚。トクエは後に敏子を名乗った。敏子は

明治40年秋田県に生まれ、高等女学校を卒業、看護婦の資格を取り、終生大栗を支援した。

大栗は上京後、全日本無産者芸術協議会（ナップ）に参加。機関紙『戦旗』に「労働者・農民の病院を作れ」のアピールが発表された。昭和4年（1929）3月5日、労働

党代議士山本宣治（山宣と呼ばれた）が東京神田の光栄館で刺殺され、全国各地で「渡政・山宣労働葬」が行われた。その日に合わせて

大栗が起草した「農働者農民の病院を作れ」のアピールが、解放運動犠牲者救済会と病院設立基金募金委員会の連盟で発表された。

同5年1月26日、わが国で初めて

の無産者診療所を開設。翌6年全国5つの診療所をもって「日本無産者医療同盟」を結成、初代中央委員長となった。

大栗診療所は、初診料無料、内服薬1剤1日分10銭、皮下注射50銭、静脈注射80銭のため、患者が大勢集まった。

しかし、同8年再び政治犯として逮捕される。そのため同10年11月に診療所は廃止に追い込まれた。

同年に出所後、父の希望により帰郷。無医村であった長生村で開業した。それから亡くなるまで地域医療に尽くし、多くの住民に親しまれた。大栗は純真で信念の人、物静かで温和、全ての患者に分け隔てなく接したと伝わっている。

かつて大栗らが種をまいた「無産者診療所」は「全日本民医連」として平成26年には全国で病院・診療所・事業所等、計1854カ所となっている。

大栗は医療・党活動に従事しながら地域にも関心を持ち『ふるさと阿波（昭和32年発行）』に「長生亜熱帯樹林について」を寄稿している。

同55年3月17日、阿南医師会中央病院（現阿南医療センター）で亡くなった。享年78。

同病院は大栗が役員の一員として設立に尽力した。



学友たちと写す(右端)



昭和54年(1979)、診察室にて(77歳)

参考資料  
「阿南市の先覚者たち 第二集」  
2014・阿南市文化協会  
次回は、初代阿南市長の「澤田 紋」を紹介いたします。